



図1 上町台北端部の弥生時代後期から古代までの地形変遷図。a: 弥生時代後期(3~4世紀); b: 古墳時代後期(5世紀末~6世紀); c: 古代(難波宮造営期, 7世紀後半~8世紀初頃)をつづいて変化する状態変数としての地形要素と地表システム内の物質移動を想定した。その時間的な変化は、それぞれの時期の植生と敏感に反応し合うことはいままでの図2には、本図に示した枠A1・2, B, C, Dにおいて想定される各時期の植生を示す。凡例に示したように、地形とその構成要素はそれらのいくつかは並列的にも、階層的にも互いに接して分布する。

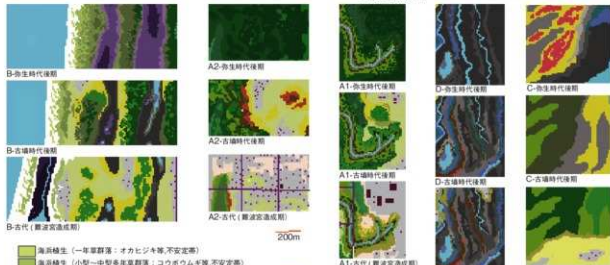


図2 弥生時代後期から古代までの古植生変遷図。図1の地形プロセの区分を下書きにして、踏跡調査における古植物学的分析結果から推測される要素、植物生態学的な適応、繁殖、遷移のなかで先し得る要素古植生構成要素(おもに群落)を有り得べき領域にマッピングした。台地上では地点とよほどの差異があるものの、概ね古墳時代後期に常緑広葉樹林(二次林含む)から常緑・夏緑樹混交林ないし二次草原や雑草地(人為的)へ急激に変化したとみられる(A1-2)。一方、台地西側の浜堤域は、その地形変遷に伴い植生の成立領域が拡大し、外海に接する低地帯では塩沼地帯植生が成立していたとみられる(B)。台地東側低地では氾濫等の河川氾濫の状況に応じた河辺林・冠水草原が分布するが、地形変化に伴い植生の成立領域が拡大したとみられる。

(上記は拙稿、辻本(2016)「日本文化財科学第35回大会で発表した「上町台北端部とその周辺低地に広がる弥生時代から古代の古植生動態モデル」の研究内容に基づく。本稿は拙稿の中、考古学が求める事象復元を要する程度の情報を活かす空間定量的な古植生動態モデルを中心とあらわしてあり、量観測要素の空間的不均質性は、地質システムに関する既存の経験と知識からでも適切なスケールのもとで、地質を系統的に覆う空間モデルとして扱うことが解されている。

上町台北端部とその周辺低地における弥生時代から古代の古景観変遷動態モデル 図版作成 辻本裕也 ((株)古生態研究所)